

緊急消防援助隊に引き継いだ 鹿折地区大火

宮城県気仙沼市消防団

本部 副団長

菊池 賢一 (58歳)

消防団歴 32年 (自営業)



気仙沼市の概要と被災状況

気仙沼市は、北上山系の支脈に囲まれており、太平洋に面した沿岸域は、変化に富んだリアス式海岸を形成し、特有の海岸美により陸中海岸国立公園及び海中公園、南三陸金華山国定公園の指定を受けている。気仙沼湾は、湾口に大島を抱く天然の良港となっている。

平成18年3月には、気仙沼市と本吉郡唐桑町が合併し、平成21年9月には本吉郡本吉町を編入した。市の総面積は333.37km²、人口は7万4,247人、世帯数は2万6,601世帯（平成23年2月末現在）である。

3月11日の大地震では、気仙沼市の赤岩で6弱、笹が陣で5強、本吉町で5強、唐桑町で6弱を観測した。人的被害は、死者1,032人、行方不明者324人である。住家被害は全壊8,483棟、半壊2,552棟であった。

ぎりぎりで行った水門閉鎖と広報活動

震災当時、私は第1分団の分団長だった。自宅から店に向かう途中で地震に遭い、消防団は震度5以上で、集合となっているので、一旦自宅に戻ってからすぐ屯所に行った。消防署南町出張所に併設する屯所は、海岸から200mぐらいの津波で

被災した地域にある。現在2部は18名いて、私が屯所に着いた時点（15時20頃）で、もう近くに勤めている団員7名～8名が集まっていた。

第1分団は3部に分かれており、水門閉鎖と広報活動を部で手分けして行った。海岸に近い第3部は水門閉鎖をする。警戒時の基準に基づき、4名が集まった時点で堤防に行った。第3部の屯所の近くに2箇所門扉があり、手動で2、3名いれば簡単に移動できるので、訓練通りにロックをはずし、1箇所5分ほどで閉めて逃げることもできたが、ぎりぎりだった。

私が行った第2部と第1部は避難広報を実施した。団員は全部で10名おり、ポンプ車5名が広報活動に行き、残り5名は地区の人たちを誘導しながら高台に避難した。私は海岸線を広報しながら、高台に避難したが、道路は渋滞しており、高台に行った時点で津波が来た。映像で見るとガソリンや重油タンクが流され、23基中22基のタンクが流された。団員の車も目の前で流されて行き、船も流れた。第1部は高台にあり、被害がほとんどなかった。第3部は海岸にあり、屯所も流されたが、消防車は高台に避難させ大丈夫だった。屯所には皆マイカーで来るが、その車までは避難できずすべて流され、第1分団で9台流された。

第1波が来たのが15時20何分か（地震から40分後）で、大島の方が早く来たと防災行政無線で聞いた。津波の高さは、最初は3mと言っていた



鹿折地区の被災状況

が、3mの津波が来れば海岸地帯は全部だめになる。今までは、床上浸水程度は何回か経験しているが、床上浸水でも物が流されるというのは今までなかったことだ。

消防団がホース延長した鹿折の火災

3月11日午後、津波が来てまもなく沖から火災が起きた。石油タンクの重油などと一緒に来て、真っ赤になっているのが見えた。停電だったので、大浦、向かいの方から鹿折地区まで、かなり遠くから見えた。第3分団は火災が最も広がった所で、第1分団も、3月12日午前2時に火災出動した。第1分団が行ったとき、鹿折小学校のプールがあった。プールには250tぐらい入っていただろう。消火栓と川は使えず、最初はこのプールから軽可搬ポンプ1台～2台を使用してバイパスの下を通して送水した。その時に余震があり、何回かストップした。辺りは火災の灯りだけで、何が燃えているのか確認できない。真っ暗で、足下は瓦礫と重油の入ったヘドロでズルズルだった。けが人がなかったのが幸いだった。

明るくなってから遠距離送水に移った。遠距離送水の元ポンプが第1分団で、バイパスの下、安波（あんば）トンネルの先、2つ目のトンネル出た左側に貯水槽があった。山水を貯めておく貯水槽で、この貯水槽には水が十分あった。そこから水をとって、800mぐらいの遠距離送水し、さらに、1km（20mホース×50本）延長して、間に可

搬ポンプを入れ、ポンプ車、小型可搬ポンプに引き継いだ。第2出動がかかっていたので、全消防団員50名くらいが集まっていた。火点には消防署員が行き、団が後方支援をした。東京消防庁の緊急援助隊が来て、12日の夕方に引き継ぎ、消防団は撤退した。

仲町の火災で再出動

自宅が大丈夫な団員は家に帰って休み、被災した消防団員は屯所で寝泊まりした。私は家を流されたので屯所にずっといた。第2部、第3部とも屯所が流されて、防火服がなくなったが、火点への消火活動がなかったので、第1部の持っている10数着で足りた。

3月13日午前11時に仲町で火災があり、出動した。日頃から火点は消防署員、ホース延長（補水）など後方支援は団員が行う。署員も交じってホース延長した。消火栓が使えず、海水しかない。消防本部がもう海水をとっていたが、海から消防団の中で最初にとったのが第1分団だった。第1分団は、東京消防庁の緊急消防援助隊に、600mぐらいの距離をホース延長して送水した。17時に戻ったので16時頃まで送水していただろうか。建物が残っている所もあったが、瓦礫だったので、くすぶっているのか、鎮火の判断がつかなかった。その後は第2分団が警戒にあたり、鹿折は第3分団が警戒にあたった。

情報収集で活躍したバイク隊

平成16年新潟県中越地震の時、民間のバイクが薬を届け、バイク隊が活躍したという話があったので、市がオフロードタイプのバイク6台を購入し、平成18年にバイク隊を結成した。その後市役所に近い第1分団にバイク隊組織を作り、運用してきた。バイク隊は分団とは別に活動していて、日頃から月に1回ほど訓練走行していた。



被災した大浦消防屯所

バイク隊員は、30歳前後の団員で、入るために大型バイク免許を取った人もおり、つい最近でも希望者1名を追加した。他にもバイク隊がほしいという分団があるが、地形や台数も考えると第1分団にあるのが、実用的というのが市の判断だった。市が必要とする情報を収集するため組織していたが、本当に活躍する時が来るとは思っていなかった。

発災直後、気仙沼市の災害対策本部は市役所に設置されたが、非常用発電機がなかったため、消防本部の方に移転し、その時点でバイク隊にも招集がかかった。

交通遮断した地域があり、無線や携帯電話も使えないので、バイク隊は2台1班を3組つくり、震災当日から情報収集した。

被災状況、消防団の活動や足りないもの、道路状況などを、一日かけて3班に分かれて情報収集した。気仙沼・本吉14分団管内を回り、一日かけて回るが、3班だけなので14分団を回るのは大変だった。道路が寸断されている所もあり、それほど細かく回れない。団本部で情報収集したものを整理し、消防署員がまとめた。バイク隊の情報は、団本部の女性消防団員がまとめた。女性消防団員は、震災当時12名～13名いた。

バイク隊の情報を市で活用した例としては、大島で火災があった時、船で本吉にあるジェットシューター（水袋がついた水鉄砲のような器具）10台をバイク隊で大島へ持って行き、機動性のある活動をした。一晩大島に泊まって、ある程度鎮火した時点で帰ってきた。その時は消防署、自衛隊

も出動した。

大島には被災していない消防団もあったので、各分団から何名とか要請があり、震災の翌週に第1分団から5名～6名くらい客船で行った。消火活動自体はしなかったが、バイク隊は、3月末まで活動し、携帯電話が復旧した4月には待機となった。

自宅は全壊してもマシな方

クリーニング店は高台にあるので大丈夫だったが、自宅は、幸町の埋め立て地区にあるので元は海で2階の50cm上まで津波が来て全壊した。地域全体が全壊し、建物が残っていてもほとんど解体し、今は更地になっている。自宅は津波だけで、火災は道路2本前ぐらいで止まったので、津波が引いたあと、2階から少しは物を持って来られた。皆同じような状況で、家族を亡くした消防団員はいなかったが、家がだめになった団員は多数おり、家が流されて何も無いという団員もいた。自宅に戻った時、息子の会社に逃げろと連絡し、それぞれが車で実家の方に避難したので、私の家族は無事だった。女房の実家が岩手県なので、家族はそちらに避難した。屯所、ポンプ車もやられるなど第1分団よりひどい地区もある。それに比べればまだ、俺はマシな方だと思った。

第1分団第1部の屯所だけが助かったので、第1部に皆集合し、待機場所となった。停電していたが、各屯所には発電機があった。ポンプ車は高台に避難して大丈夫だったので、第1部の屯所に置き、そこから火災出動も行った。

食事は、消防後援会有一些食材を持ってきてくれて、女性消防団員が大活躍して、食事を作ってくれた。また、近くの団員の奥さんが来て、3食数日間かは作ってもらった。水は井戸水がある所からもらった。発電機があり、プロパンガスもガス会社に勤めている団員が機材を、灯油屋の団員が、灯油を持ってきてくれた。気仙沼で1軒だけガソリンスタンドが営業していて、自家用車

のガソリンはなくなったが、緊急車両だけは優先されていたので、ガソリンは切らさずに済んだ。

遺体搬送から夜間警戒の実施

リバーサイド春圃という介護施設で亡くなった人が多く、消防団が遺体搬送をした。消防署員も自衛隊も手が足りなかった。3月12日に銀行のATMで2,000万円盗られたという報道があったが、3月11日以降、治安が悪い時期に夜間警戒をした。夜遅くは、鐘は鳴らさないが、治安維持のため、赤灯を回して走っていれば抑止力になるのではないかと思い実施した。火災の警戒もあるので、昼間も何回か交替で回った。屯所に詰めていたのは1週間だが、その後は当番の人がその時間に来て回った。消防団員としての夜間警戒は8月13日まで行い、9月で消防団活動に区切りがついた。

高台に向かう広い道路がない

一番に団員の身の安全を確保し、ポンプ車を確保する。高い所が地区にない所もあるが、今回と同じくらいの津波が来ても、被災しない地域に屯所を設置する。今回、ポンプ車は大丈夫だったが、備品は全部流された。通信は、消防団無線のようなものがあれば良いと思う。

水門閉鎖に行っても亡くなった消防団員もいる。水門を閉鎖すると、多少時間は稼げるが、そのために危険を冒してというのはどうかと思う。門扉の外、海側に工場があり、埋め立て地にあった工場は壊滅状態だった。門扉の外側に働いている人の車を駐車していて、違法駐車だが閉鎖すると車が出せなくなるので、いつも門扉が上がっている状態だった。門扉閉鎖訓練をしていた時、工場の人からクレームがきたこともあった。できれば水門閉鎖は自動制御でできればよい。

消防団といえども、何回か警報が出ても津波が

来なかったというのがあり、今回は地震の規模が違ったので“来る”という思いは強かったが、もしかしたらまた来ないのではという気持ちも確かにあった。屯所や自宅に戻ったり、何か取りに行ったりして亡くなった人が消防団員でもいる。消防団としては避難誘導しながら高台に避難するぐらいしかできない。各自で逃げなさいという“津波でんでんこ”の言い伝えは、自分で自分の避難を確保するということだが、避難誘導中には自分だけというわけにはいかない。

避難場所は高台の小学校や中学校で、そこに行くのに広い道路がない。楽にすれ違える道路は1箇所～2箇所、車1台しか通れないところがほとんどで、渋滞になる。実際そうなった所があった。車を置いて避難すれば助かったと思うが、車で避難している人の中には、要援護者が乗っている場合があり、渋滞しても車を置いてというわけにはいかない。途中で被災して亡くなった人が結構いると聞いた。

防災訓練は各行政区によって違うが、年1回は実施しており、避難訓練が役に立った。自宅のある幸町では、訓練時の避難路を使って実際に逃げた。避難訓練は必要だ。一番近く、歩きやすくて早く避難できる場所を想定する。図上訓練も、各消防団で年2回、火災予防期間中に行っている。消火栓を使わず、消火訓練をできない地域もある。

避難訓練をやらなくても、各行政区で広報を回したり、独居老人の安否確認をしたり、誰が独居老人を避難させるか決めていた行政区もある。第1分団の滝の入地区は、津波危険はないが、土砂崩れや鉄砲水などの危険があり、避難する時に若い人がお手伝いして老人を避難させる全国のモデル地区になっている。年1、2回は消防団も参加して安否確認を含めた避難訓練で、決められた避難場所に集合する訓練をしている。訓練ができない時はスライドで、防災マップ、地震について説明したりする。今回のことがあって、地域の人も興味があるので、結構、防火講話も開いている。

消防団無線を通じて知った 我が町壊滅の知らせ

宮城県気仙沼市消防団
第13分団 副分団長 **三浦 弘一** (56歳)
消防団歴 26年 (小売業)



気仙沼市本吉区を管轄する第13分団

気仙沼市消防団第13分団は本吉地区（旧本吉町）に属し、震災当時、94名の団員が所属していた。第13分団の第1部は自営業者が多く、第2部の第1班は漁業が多い。

3月11日、私は木造2階建ての衣料品の店舗兼自宅にいた。客4人を店舗裏の鉄骨造りの車庫に避難させ、店舗を閉めて活動服に着替え、車は使わずフル装備で、走って14時56分に気仙沼市役所本吉総合支所に着いた。

第13分団は、旧本吉町の平成16年3月にアナログの消防団無線を導入しており、地震災害時の初動計画では、各班事前命令に基づき、避難広報や水門閉鎖活動が割り当てられているが、無線統制をかけ指揮をとるために班長と副分団長の2名が本吉総合支所内の本部に来るとされていた。途中、道路が陥没している箇所があり、火災の心配をしたが、正直、津波が町裏まで到達することは頭になかった。14時56分に消防団無線を本吉総合支所で開局したが、応答はなかった。山奥の炭小屋で、炭窯が落ちて燃える火災があり、2隊出動して、すぐ鎮火できた。

たった7分間で壊滅した小泉町

15時40分頃、支所庁舎の2階で窓越しに「何だあれは？」と、見えたのが津波だった。家屋が傾き、動いている。波が黒というよりは土色の洪水時の河川の色だったが、音は聞こえなかった。自分を含めて消防団員4名、課長をはじめとする支所職員がいたが、慌てて何人かが屋上へ上がり、写真を撮った。津波が来るとは思っていたが、ここまで来ると考えなかった。引き波の報告はなかった。後から家族から聞いた話では、高い所でも“メリメリ”という家屋のつぶれる音がしたと言っていた。

15時10分、「水門を閉鎖した。」と無線連絡が入った後、次々に津波の連絡を受けた。

15:23 小泉川の逆流確認

15:24 蔵内漁港に津波到達、小泉大橋近くの堤防決壊

15:25 大谷町裏に津波の浸水があった。

15:26 小泉町浸水

15:28 小泉町家屋流失

15:31 小泉町家屋壊滅状態

15時23分以降の無線が残念で仕方ない。津波が川を遡上しているという連絡があってから、壊滅までたった7分間の出来事だ。被害状況を把握し

たというより、家屋流出、壊滅といってもどれくらい規模なのか正直なところ想像がつかなかった。翌日現地に入って見たら、小泉の町がなくなってしまった。町がなかった。映像に出ている志津川や陸前高田と全く同じで、家屋などがすべて山側に押しやられて跡形もなく、他の地区から比べるとガレキの量自体が少なかった。

無線は私と本部の班長が2人で聞いてメモし、支所の職員がさらにそれを補助して書き留め、時系列にして貼り出た。するとそれを確認した庁内の職員がザワついた。

本来ならば、無線を避難誘導、広報活動、安否確認等で活用しようと思っていたが、15時40分以降、実際に津波を目視し、私たちはすでに小泉地区は壊滅していると確信した。伝えてきたのは消防団無線だ。全車両にはついておらず、小泉地区には3台無線があり、第11分団で2名の消防団員が殉職した消防車からも報告を受けていた。

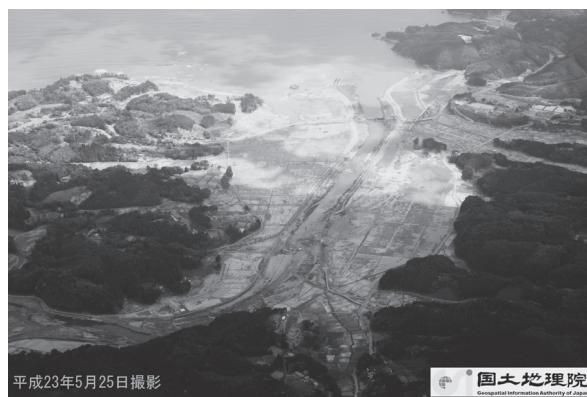
川で遡上を確認し、消防団が閉めることになっていた水門1箇所を、大橋を右折して閉めた後、避難広報をしていて消防車ごと流されたようだ。

小泉でポンプ車が広報活動しても、津波はここまでは来ないだろうと自宅に残った人もおり、町裏では7人亡くなった。宮城県沖を想定した津波の想定浸水地域10mぐらいの所にある建物の上を呑みこむように津波が来て、水道局事務所に逃げた人たちや、職員2名、常備消防署員も1名も亡くなった。想定外だった。

本部を離れ、救助活動へ

15時50分過ぎに本部の無線を佐藤班長に任せ、上司である副団長の許可を得て、無線を持って2名で状況確認に行った。16時02分に津谷小学校に行き、迎えに来ていた保護者の車の確認と児童数の確認を先生方をお願いして本部へ報告した。

次に町裏を通過して中学校に向かった。中学校の通学路になっている中道線の路上には、小泉海岸から流されてきたと思われる松の木が横たわって



気仙沼市本吉町の陸前小泉駅周辺（国土地理院）

いた。中学校の手前で、60歳～70歳ぐらいの2人の婦人を、中学生3年生の男子2人が救助して中道線の近くまで来ていると聞き、私たちが行って泥の中を助けた。最初、本吉病院へ向かったが、被災した家が覆い被さって道路が遮断されており、病院の1階は水浸していた。外傷等がなかったので病院より避難所の方が良いと判断して、車に乗せて中学校に搬送した。

中学校には、残っていた1、2年生と先生方、近くの人が避難していた。第12分団（山田地区）が軽トラックで心肺停止状態の3人を運んできたので、私が引き継いで保健室に入れて心肺蘇生法を実施した。高校の先生がAEDを持ってきたが、30歳代の母親と1歳と3歳ぐらいの子ども3人も蘇生できず、“無力感”に包まれた。

私たちは、16時50分、すでに帰宅していた3年生以外の生徒・職員70人、一般の避難者10人と本部に報告した。第13分団の他の団員が、車両に乗っている親子など7人救助した。

避難所となった小学校で救援活動

その後、小学校に行き、安否確認と避難者数を報告した。消防団としては子どもの健康面を考え、自家用発電機もあり空調が整っている近くの公民館への避難を提案したが、保護者は公民館が津波浸水地の近くであるので小学校にいたいと言い、避難していた近くの住民も含め、小学校の校庭に120台強の車両を置き、車の中で待機となっ

た。

18時過ぎに避難者への炊き出しを近くの自治会に依頼した。各自治会には合併前に発電機を用意してあった。断水していたので水は各自持ち寄った。19時20分に小学校に220個のおにぎりを届けてもらい、子ども優先でおにぎりを配給してもらった。車で避難している人の中に高齢者1人、妊婦2人がおり、妊婦はすぐ出られる場所に車を移動した。

小学校への避難で一番困ったのは、燃料がなかったことだ。寒さのため車両もエンジンをかけ暖房をつけていたが、停電でガソリンスタンドは機能していなかった。我々が積んでいた携行缶20ℓくらいも緊急用に備え、本当に必要な分だけ使った。車1台に2人乗車では効率が悪く、燃料がなくなってしまうので、午前2時～3時頃、校長先生と教員から保護者をお願いして、台数をいくらかでも減らしてもらった。翌朝7時～8時に解散した。津波警報はまだ解除されておらず、無線で断片的に入ってきた情報を基に、帰る人たちに各地区の被害状況と通れる道路、近づかない方がよい場所などを伝えることができた。

遺体の搜索活動と警備

3月13日の副分団長会議で、遺体搬送を分団から出すよう言われた。遺体の搜索・搬送が私たちがいいのかという戸惑いはあったが、総合支所の市民生活課の職員2名と消防団員4名、計6名が待機し、搬送にあたった。

どうしても消防団は地域密着しているため、亡くなった人が「顔見知りで辛い」という話が出た。3月20日頃、緊急援助隊や警察の応援が来たため、団長から警察にやめさせてほしいとお願いした。私の知る限りでは、3月29日に子どもの遺体を遺体安置所へ搬送したのが最後だったと思う。

3月～4月には、日中、防災行政無線がバッテリー切れで使えなかったため、消防団車両を使っ



震災当日の消防団無線による応答状況を再現する三浦副分団長

て各分団1班1台で広報活動に回った。泥棒が入ったというので、8月13日まで火災と財産保全のため、夜間警戒活動を実施した。当時、避難されない人も多かったが、停電で真っ暗だったので、警鐘を鳴らしての巡回は、地域の方が安心感を持ったという。

活躍したアナログ消防団無線

消防団無線の整備には450万円程度かかり、導入時は高いと思ったが、今回は武器になった。宝の持ち腐れにならないよう、全員がポンプ車と同じように使いこなせるよう、月1回、無線の運用訓練をしており、年月が経つに連れて運用方法はかなりうまくいっていた。各隊は屯所に置き100Vの充電器を用意している。電話が通じず現地に行けない時に、消防団無線で断片的ながらも被災地のことが署や消防団で把握できたのは有効だったと思う。

普段の通常の火災時にも、1台は広域消防にあり、気仙沼消防署本吉分署からの指揮のほか、水利部署や中継送水等に活用している。今回は1台無線機が流されたので、分署隊のものも借りて15台、途中、富士通から1台提供され、16台で運用した。震災当時電話は使えず、携帯電話も通じず、つながるまでに1か月以上を要したが、各分団長には消防無線で連絡が取れた。集合時間、集



本吉町大沢漁港の被害状況



本吉町大沢漁港の被害状況

合場所、搜索範囲、場所が分からない時も無線で伝えた。当初から「バイク隊より無線」という頭があり、物は運べないが、情報は運べる無線が有効活用できた。

台数的には無線はあと4、5台は欲しいが、11日は混信がかなりあり、岩手県陸前高田市の消防団無線とかぶった。本吉のほか、旧気仙沼市内、唐桑、大島まで入ると誰が統制するのかという問題が出てくる。消防本部の通信指令課のようなシステムがあればよいと思う。非常備の組織なので、それはできないと思うが、いずれにしても消防無線の装備は大事だ。

本吉総合支所での対応

本吉総合支所1階が、気仙沼市災害対策本部の本吉支部となった。旧本吉の団指揮本部は総合支所に作るようになっており、慣れていた。行政の方も含めて地元の人が多く、意思疎通がかなりうまくいった。気仙沼市内では、比較的、本吉地域が被害の全体像を集約するのは早かった。会議の時に今日の活動報告と明日の予定、どう対応したかなど出した。毎朝7時と17時に課長職以上会議を開き、消防団と常備消防、自衛隊、警察、緊急消防援助隊（山梨県隊）、社協（ボランティア）等にも入ってもらい、情報の共有化が図れた。

しかし、県と防災機関を結ぶ全国瞬時警報システム（Jアラート）があるが、メールやFAXは

できなかった。各箇所から電話をすると大変なので、役所としては災害担当の所に要件を集約して電話をするようにしていた。本庁の災害対策本部に連絡する時、50回かけて1回つながるかどうかで、つながればその電話で要件を全部話さなければいけない状態であった。

発災直後何日かは、気仙沼市では“タクシー無線”を活用した。防災センターにタクシーを止めて主要拠点にタクシーを配備してもらい、救急隊を要請した。消防団無線でも救急隊要請は結構あった。本吉総合支所に本吉分署員も詰めており、そこまで無線を飛ばして分署への有線専用電話で、救急車を要請した。常備消防と消防団と行政との連携プレーはうまくいった。

鹿折の火災には、3月12日に出動要請は来たが、対応できないと副団長が回答した。翌13日の大島の火災に対する要請でも出動しなかった。小泉地区では、団員40名のうち30名がほぼ壊滅状態の被災をしている。山の方の第12分団からは積極的に応援に出てもらった。海沿いの第11分団、第14分団は、分団、家屋を含めて被災している。第13分団も被災はしたが、出られる団員数も多いので搜索活動等についてはできるだけ多く出ようとした。内陸部からの応援があれば助かると思う。

最近、階上地区で大規模な火災があった。原因ははっきりしないが、瓦礫の集積地から自然発火したようだった。

津波てんでんこの精神で 培われた地域力

宮城県南三陸町消防団

副団長

高橋 一郎 (64歳)

消防団歴 33年 (半農半漁)



南三陸町の概要と被害状況

南三陸町は、宮城県の北東部で気仙沼市と石巻市の間に位置し、東は太平洋に面し、三方を標高300m~500mの山に囲まれており、沿岸部はリアス式海岸で南三陸金華山国定公園の一角を形成している。東西南北とも約18km、総面積163.74km²、人口1万5,419人、世帯数は4,880世帯（平成24年2月末現在）である。海岸部は、日本有数の養殖漁場になっている。

南三陸町消防団は12分団で構成され、消防団員数は555名、そのうち、女性消防団員は8名となっている。今回の震災で、多くの消防車両が被災したが、その後寄贈を受け、消防タンク車1台、小型ポンプ付積載車37台、小型ポンプ2台で活動している。



崩壊したコンクリート製の建物

東日本大震災では、南三陸町の志津川で6弱、歌津で6弱を観測した。南三陸町では、人的被害は沿岸部に集中し、死者565人、行方不明者230人、負傷者不明、住家被害は全壊3,142棟、半壊169棟となっている。

今回の活動記録は、団本部の記録と戸倉地区を管轄する第2分団の記録である。

地震発生、水門閉止できず避難

消防団の団員は、定員630名のうち550名で、ほぼ充足している。半分くらいの団員は、昼間は地元にはいない人たちなのですが、残りの人は参集できないが、農業、漁業従事者が多いので5分もあれば集まる。第1は火災対応だが、行方不明者の海の搜索活動も多い。地元の消防団が一番地域のことを知っている。

3月11日に地震が起きた時、警察署の青少年補導員会議でホテル観洋の4階にいた。少し揺れが収まった時玄関から脱出し、家と地域が心配だったので、無理して車で走った。

チリ地震津波、十勝沖地震の経験があるから、常識では考えられないような津波が来ると思った。歌津と志津川の境で少し海の水が下がり、歌津大橋を渡る時に海が引き始め、長須賀（ながすか）海水浴場でも、まだ波は来ていない。海拔3mぐらいの少し高い所に登り、海を見ながら走っ



津波被害を受けた水門

で家に着いた。

家で活動服を着替えて、海に下りた。水門を閉鎖したか聞いたら、まだと言うので、水が引いているうちに、閉鎖しなければいけない。危ないのはわかっていたが、鍵を妻に用意させ、他の団員と水門閉鎖に向かった。水門は簡単な設計でストーンと閉められるようになっていて、歪んでいて閉まらない。バーッと水がすごい勢いで入り始め、1 mぐらいの高さで50cmぐらい近くまで来たので、諦めて車に乗って急いで道路を上がり、津波に追いかけられながら、間一髪逃げた。水門が下りないとわかった時点ですぐ引き返し、他の団員もいるので避難すべきだったと思った。

船の沖出しに成功

地震・津波時の団員の行動としては、自発的に船を沖出しする。船を持っていない人は車で高台への避難を広報することになっていた。歌津では、30隻、30人が自宅にいて1、2分で下りて船を沖出しし、1人も犠牲者はいなかった。この中に団員も含まれる。時間的に遅かった人は、出発して5分ほどで波の山がしぶきになり怖かったという。夜中に大きい波が来て、第2波まで港内で大丈夫だった船が、朝になったらひっくり返されていた。志津川は沖出ししなかったようだ。

沖出しした人は助かって、携帯メールで3月11日に無事を知らせてきた。一箇所に固まり、ロー

プで一団になって避難していた。内湾から沖合に流された船が多くあり、仲間の船だからとロープで自分の船につなごうとしたが、北西の風、雪混じりで波も高くなり、自分の船も危なくなって、最後は泣く泣く離れたという。船には常時ジュース、飲料水等を積んでいた。船は3月14日に帰ってきたが、湾内に漂流物が多く危険なので、湾内の沖合に係留し、小さい船で通った。湾内に入れるようになるまで10日くらいかかった。

“津波てんでんこ”と搜索活動

場所によるが、この地域では必ず引き波がある。地震の揺れが大きいほど大きい津波が来るだろう、引き波を見た段階で大きい津波が来ると自己判断する。揺れが来たら、今ではテレビの速報を見て津波が来るか判断するが、私たちは大きな地震が来たらすぐに動いて、車のライトを照らして浜に下りて見て、津波が来るか地域で判断していた。今回の地震でもテレビやラジオを見ずに状態で判断した。80歳代の人でも初めて経験する大きな揺れなので、津波は5 m～6 mを超え、防潮堤は壊滅すると思ったという。防潮堤は5 mで設計してあり、6 mの津波で1 m超えたぐらいなら大したことはないと思っていたが、全体が何千kgという圧力で押し上げて来る“津波の力”を考慮していなかった。狭い所ほど波は上まで上がった。

今回は異常なほどの引きはなかった。ニュースでは高さばかりで引きは報じないが、県漁港では、船が浮いていたので、-5 m以上は水が引いていないと判断した。第2波は第1波が引かずにすぐ後から来た。田の浦地区では、1月に納入したばかりのポンプ車を高台に上げて助かった。

住民は、皆、車で避難したが、道路から直接山に逃げたり、地域の災害弱者はすぐに各自避難していて、救助せずに済んだ。嫌だと拒否する人もいるが、高台で安否を確認した。その後消防団は、行方不明になった人を捜し回った。

【高台で聞いた話】

- ・車で避難した娘が見えないと半狂乱になったが、他の高台に避難していて無事だった。
- ・加工場経営していた奥さんと男性従業員の2人が、一旦高台へ避難した後、まだ津波が来ないからと2階へ物を取りに行き流されたのを皆見ていた。
- ・妻と船をロープで結びに行った人が、波が追いかけて来たのですぐ高台に逃げたが、後から来ていたはずの妻が見えなくなり、捜索2日目に自宅の角にいたのを発見。
- ・古い住宅で介護用ベッドに寝ていたおばあさん（97歳）が、地震と津波で壊れ、材木にはさまれて出せない状態だったが、家族が「布団をかけて来たのもういい」と言う。翌日に引き出し、娘宅に安置し、警察が検視した。

井戸水に救われた避難所生活

この辺は泊浜生活センター（地域の集会所）が避難所になった。漁業の町では、漁船の機器や発電機を陸上に保管しており、一緒に逃げた油屋は油タンクを積んだまま逃げたので、その軽油もあった。センターにはガス設備や、燃料もあった。避難所はその晩から電気、石油ストーブをつけ、テレビも見ることができた。

避難所には当初300人ほどいたが、半分は自宅に残った。きつかったが、足を伸ばせる程度で眠れた。地域の人が毛布や米を提供し、近くに民宿が3軒残っていてガスがあったので、煮炊きができた。水は、各戸で普段から雑用水で使っていた井戸を活用した。生活センターに貯水槽はないが、2、3箇所の井戸を集中的に整備して、発電機を持って行ってポンプアップし、避難所まで運搬して生活用水や飲料水に使った。煮沸すると飲み、水量豊富で水洗トイレに使っても十分な量があった。馬場中山生活センターという避難所はテレビ局が40日間張り付いて取材していたので大変だった。



津波により破壊され荒廃してしまった建物

足で各戸を回って情報収集

3月12日朝から避難所周りをして、大体の被害者数をメモした。学校の子どもたちを心配して避難している保育園へ行くと、子ども2人の行方がわからないと言うので、私が徒歩で片道3kmぐらいの山中を行き、各戸を回って無事だとわかった。途中の被災状況や、避難状況も聞きながら帰ってきた。

たまたま無線機を持っていたので、志津川と交信したかったが、他地区は充電できていなかったり、感度のない所もあり通信できなかった。消防関係は、アリーナにいと、無線でわかった。消防や海上保安庁の人とも会話をした。

町の本部には、3月13日の午後か14日朝に行き、状況を聞かれたので、あちこちの状況を徒歩で聞いて回った。1,000人くらいの地域だから、避難者はどこに入っているか、誰が無事とか安否を確認し、3月14日には、地域の状況を把握していた。

町の防災行政無線はデジタル化しているが、バッテリー切れで充電できなかった。無線は水平方向で、山からだ伝わらないなど、使い勝手が悪く不評だった。アナログの方が良かった。役場や団員とのやりとりには個人の携帯電話を使った。

4月中は本部に詰めていた。自衛隊、警察の応援が来たので、案内して回った。天皇陛下が見えた時も警備担当だった。地域の方とのふれあいを

通して一番顔が広く、基本の所を良く知っている
ので、本部に来る相談事にも対応した。

自主的に始めた遺体搜索

行方不明者の遺体が上がったと連絡があった
が、警察署も役場も機能していないので、消防団
が指揮することにし、名足小学校体育館に遺体を
安置することにした。教育委員会に連絡がとれな
かったので、校長に遺体安置所にする伝えた。
役場に連絡する余裕はなく、1人ずつ確認した。
団員が遺体搜索を始め、いろいろなことをした。
警察の人が夜来て「遺体を安置している」と伝
え、翌日検視となった。

遺体が上がるとほとんどの人が地域出身の人な
ので、現場に行き対応した。町に関係なく、団と
して一斉搜索した日もあった。歌津中学校の本部
の脇、隣が歌津出張所（ポンプ車、救急車配置）
に張り付いた。4月25日からは、各地から応援隊
が来てくれ（主に秋田県から）、交替してくれた
ので楽になった。5月になると浜での共同作業に
参加した。

火葬場もすべてやられたので、山の上に土葬し
ようと場所を探し、伊里（いさと）前小学校の体
育館にすべて棺を移した。

自力で切り開いた“命の道路”

道路が寸断し、物資の輸送ができない。畑を通
る公道（赤線）があったが、その道路を回復さ
せ、最低限の物資輸送をしようと。3月13日朝、
隣部落に行って町会長と会い、地権者に会って回
れないので、畑を崩して道路を拡幅させてくれな
いかとお願いした。皆被災者だから、「境界面は
いいから、あんたがいいという所まで使ってよ
い」と言ってもらえた。なんとか午前中に通れる
ようにし、境界の一部も変更して、道路を回復さ
せた。しかし、「何でもっと大きく道路を広げな

かったか。これから作るとなるとお願いするの
に苦勞する」と後で言われた。

軽トラックで物資を運んだ。雨が降ると藁を敷
いて物資を輸送した。3日目から遺体も搬送し
た。歌津の名足～馬場（山の中の普段は使わない
道路2km）間を回復させた。重機1台で行った。
仮設道路ができたのは1か月後だった。その1か
月の間は命の道路となった。

消防署の待機態勢と警備活動

毎日なんども「火災だけは出すな！」と言っ
て回った。火災は、震災後、志津川で4、5件発生
したが、歌津はない。火事が起きなくて良かっ
た。

今回は、消防車が流されたし、消防車があつて
も燃料がないといった問題があった。一日一回地
域を回って、団員の活動状況、遺体搜索状況等
を確認した。役場の人間より詳しかった。食事の準
備もした。救援物資から、長靴や懐中電灯を提供
した。

消防職員が9名死亡したので、3月18日から配
置換えをして消防出張所の職員が5名体制になっ
た。消防の救急、夜間救急を案内した。志津川病
院がやられてしまったので、気仙沼公立病院へ回
した。救急車が出動すると3名乗って行くので、
残り2名の職員では消防車を動かせない。各地区
ごとに日程表を組み、3名くらいずつ団員を24時



整備されつつある被災地

間ないし12時間張り付ける体制を4月24日まで続けた。出張所は今は6名体制になった。

警察から警備活動の要請があり、3月14日から20日間くらい、消防車で巡回し、定点的に夜の12時に見張りをした。警察の応援が来てからは、一日一回は巡回した。流された金庫もすべて拾い、持ち主に直接渡した。

防災の町としての自負を持つことが大切

津波は想定外であり、役場では36人が亡くなった。先に出たのが消防署で、広報へ回り、神割崎(かみわりざき)などの2ルートで、すぐ避難させた。

南三陸町は、防災行政無線で地震後すぐに津波と伝えていたが、「早く避難してください」と呼びかけていた女性は亡くなった。すぐに避難させるべきだった。緊急性のある時、放送では、地元という言葉で「志津川町なくなるから、できるだけ早く高い所へ」など、地域に合った強いメッセージのある言葉を考えておくと、より多くの人々が助かる可能性が出てくる。

何のために訓練をしているのか。チリ地震津波の教訓をもって訓練し、全国に南三陸は“防災の町”とアピールしているのに、どの程度、町民が認識しているのか。沿岸部は6mまで線引きしていたが、山奥の平らな所までは線引きしておらず、津波避難訓練では、避難してきた人のための



津波に津波に襲われ鉄筋の骨組みだけが残った防災対策庁舎

炊き出し訓練をしていた、津波の認識がない奥の方(在郷、西戸地区)の人的被害が大きかった。

消防団活動の課題としては、仮設住宅ができる、今までの範囲と違うので、どこの水利が近いか頭に入れておく。装備として、歌津地区はポンプ車がないが、あった方がよい。

団員は、脆弱な気持ちを持っていない。ただ、遺体捜索などは年の人はいいが、若い人には見せたくない。団員によっては、嫌だと言う人ははずすが、参加してくれるので活動上の心配はない。未だに1週間に1回くらい消防署と情報交換しているが、一番困っていることは、定例会で情報交換する場がなくなったことで、すべての情報に疎くなってしまったことだ。

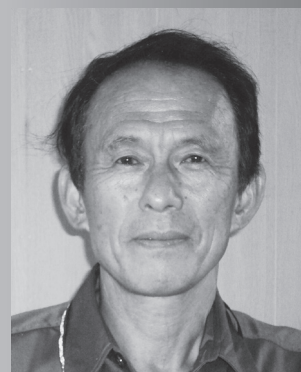


津波の跡が生々しく残る

船は沖出しできず、 避難に次ぐ避難

宮城県南三陸町消防団
第2分団 副分団長

村岡 賢一 (61歳)
消防団歴 40年 (漁業)



地震の揺れで水門閉止後すぐに避難

消防団は23歳くらいの時から40年やっている。南三陸町の11地区のうち、6地区が第2分団にあたり、団員は9名ずつ、定員54名。地区内は海あり山ありで、波伝谷、在郷、水戸辺、折立の4地区が海に面し、漁業が多い。

3月9日に地震が発生し、後から思うと、3月10日には海が真っ白になるという異変があった。カレイが子をなしているかと思ったら、真っ白なものが海底から噴き出していた。

3月11日はめかぶの最盛期で、家で作業をしていた。孫と娘が来ていて、そのときは昼寝をしていた。地鳴りからして大変だと思った。この揺れなら10分で津波が来ると思い、女房と2人をせき立てて外へ出した。揺れが収まるのを待ってすぐ逃げるように言った。

地震・津波対応では、一番先にやるのは水門を閉めること。岸壁に着いている船の碇を掛けて(錠上げ)、水門を閉め、消防のヘルメットと防寒着を取りに家に戻り、重要書類等を持ち、軽トラックで高台に避難した。海を見たらまだ動きがなかったので、リフトを高台に上げた。船は、遠浅の仙台湾や福島と違い、こちらでは、60m線まで根(岩場)があるので、それを越さないと大波に遭うが、安全な水深100mの所まで沖出しするのに全速力なら30分で行ける。しかし、今回はあま

りに大きい揺れだったので、沖出しの途中で波が来たらと、船を出せなかった人が多かった。沖出し中に亡くなった人はいない。

水が引き始めたが前の地震の時の引きが大きかったのに比べて引きは小さく、海の水が下から湧き上がり、スーッとふくれあがる感じで、「何んだこれは?」と思ううちに、岸壁にあった船が2艘ひっくり返り、何秒もしないうちに堤防を乗り越えてきた。瞬間的に「これはダメだ。逃げろ!」と退避命令を皆に出した。3回目の引きで志津川湾の水が皆なくなり、海の底が見えた。これは大変だ。どんな大きな津波が来るかわからない。山の一番高いところへ避難した。その時、引いた分の水が来ると観念したが、引いた分は上がってこなかった。ここの高台でも低いと思い、別の山へ向かった。そこは墓があって20数人が墓の上に上がったが、足元まで水が来た。置いてきた車から100mもない最初の山は、高さ20mくらい



津波が何度も襲いかかり、すべてを奪った



津波避難ビルに指定されていた建物

あったが、2、3分で隠れた。

押し波は1回だけでなく、津波が次々と連動して来た。その破壊力たるや、家があつという間にグシャグシャと水の中に埋まった。津波が来てから雪が降り始めた。作業小屋に入ってシートなどを引っ張り出した。高い所にシートを張って年寄りなどを寄せて、寒いからたき火をした。そのうち、水に流された人が2人上がって来た。皆で服を着せたり、火にあたらせたりした。

瓦礫で椿島（別名：青島）まで引き波で持って行かれ、流された人が1人（車に乗ろうとして流された70歳くらいの人）いた。翌日、瓦礫の中を1時間以上かけて行き、船の中で低体温症で意識が朦朧としていた。3名で担架を作り引っ張り上げ、湯たんぼ代わりに石を焼いてつけ、皆でマッサージをし、とにかく暖めた。

救助を要請するもヘリは来ない

3月12日午後から中学校にヘリが来るというので、息も絶え絶えの人、透析が必要な人、酸素吸入が必要な人の3人を救助して欲しいと、自衛隊に要請に行った。逃げる時、消防団の防寒着とヘルメットだけ持って出たので、どこに行っても話げできた。ヘリコプターを要請したが、来なかった。

食べ物を何とかしなくてはいけない。3月13日午前中、分団長と一緒に、米や水等の食糧調達に

行き、午後からヘリポートになっていた戸倉中学校にヘリを要請しに行った。役場職員、自衛隊もいた。酸素吸入が必要な人は分団長の父親で、夕方、折立宇津野高台に入谷の消防副団長が連れて行った。今は酸素マスクをつけなくてもよくなった。重い透析の人は3月14日まで持ち越しになった。

もし1日目にヘリが飛んできていたら、何人助けられたか。大勢の人が流され、瓦礫にすがって助けてくれと手を振っていた。何でヘリが飛んで来ないのか、1人でも2人でも助かったのではないかと地団駄を踏んだ。寒かったのでよほど体力がないと助からない。山の上で水をかぶった人は助かったが、押し寄せた瓦礫を低地で受けた人は即死だった。沿岸部の人たちは訓練していたが、西戸地区のような海がない山の方に住んでいる人たちは、津波は来ないと思っており、一家全滅した家いくつもある。リアス式の海が深いところは力を持ったまま、同じ高さを保ったまま津波が来る。2、3tの車が空中を舞うように流され、橋桁にぶつかった波が天に龍が昇るようだった。水の力はすごいと思った。

登米市の避難所へ移動

水も食糧もない。ここには死んでしまうと判断し、3月14日に登米市へ行くことを即決した。警報が出たり解除されたりした日で、下はガレキで歩けない状態だったが、危ない状態の2人と何人かいたお年寄りを、昼までに県警ヘリでベイサイドアリーナへピストン輸送した。見届けて一安心して、拾ってきたリヤカーに歩けない人を乗せて登米市の中学校に大移動した。

登米市に行って、初めて横になった。二晩誰も寝ていない。びっくりして感覚がマヒしていたのか、疲れたとか、眠いという感覚がなかった。登米市の中学校の体育館には毛布や布団がたくさんあった。市が放送したら、援助物資がたくさん集まったそうだ。登米市で助けてもらった。1人だ

けで頑張るのではなく、元気なところに助けもらうのがよいのではないか。登米市は昔から行き来あり、親戚がいたり、つながりがある。お風呂は、地域の人がボランティアで提供してくれたり、老人・福祉施設や会社の寮も使わせてもらった。登米市の中学校の体育館には370人が入り、1か月いた。

避難所で自治会を作ることになり代表になった。1日3回ミーティングして、トイレの使い方、たばこの喫煙場所などを決めた。そのうち、校長先生から教室を使って良いと言われ、半分の人は教室に分散させた。綿ぼこりがたち、だんだん咳が出たり、下痢をしたりと不衛生な状態のため、体調を崩し始める人が出てきた。神経質になってきて子どもが騒いでいると怒鳴る人がいたり、夜徘徊する人がいると苦情が出たため、気を付け合いながらやっていた。

被災した町では力がないから、沿岸部と内陸部で、被災していない地域が結びつくことが大事だ。共倒れでは助けようがない。テレビの宣伝ひとつで物資の流れが極端にかわる。テレビで志津川町ベイサイドアリーナと言えば、そこに集中し、物が偏ってしまう。登米市でも中心の公民館等には集中したが、善王寺や豊里の研修センターなど離れた所の人には行き渡らなかった。

もうひとつの弊害は、登米市に避難した人は登米市が管理し、志津川町は志津川町が管理するので、同じ町の被災民が、違う扱いを受けた。ベイサイドアリーナの物資を登米市に避難している人に、回すという流れはない。皆が情報が欲しいと



荒れ地に残る傾いた建物

思っているのに体育館にはテレビがなく、20日過ぎた頃にテレビが見られるようになり、避難所を出る頃に風呂やソーラーがついた。スピード感を持って瞬時につけてくれればどれだけ有難かったか。必要なものは聞かなくてもわかる。風呂に20日も入れない人はざらにいた。

コミュニティ単位で分散した避難者

1か月後、コミュニティごとに3地区に分かれた。私は水戸辺という所で50人ほどで善王寺に移り、その時に肩の荷が下りた。善王寺では廃校になった小学校の体育館に入った。最初の何もなくなった時の気持ちを忘れ、わがままになってくるから気をつけてと、何かあると50人で全体会議をした。仮設住宅にどんどん移っていき、それまで仲良くやっていたが、最後に抽選で2家族が当たり2家族が残ったら、険悪になった。仮設住宅は、コミュニティごとに地域選定をして、仲が良いうちに抽選すべきだ。

役場は36人も亡くなり、誰がカバーするのか。大災害になったとき、地域には優秀な人もいる。事務的なことは他県から応援に来た人にやってもらい、地元の顔見知りの人が窓口にいた方が問題ない。自分たちの町は自分たちで復興させるんだというのが励みになる。

娘は妊婦のため保健センターに行き、妻と孫と一緒に新潟の温泉で暮らしている。3番目の娘が石巻から4、5日してから逃げて来て、私と避難所で暮らし、気仙沼にいる上の娘とはメールですぐ無事が確認できた。8月11日に孫娘が生まれたので、一軒家に家族で移った。登米市の空き家はすべて埋まった。

今回一番大変なのは、地域の船が流されてしまったことで、再建の足かせとなっている。うちの地区は4隻残ったが、隣の地区は1隻も残っていない。私は船を沖出ししなかったが、たまたま反対側の沢の近くに流されていて助かり、現在修理中だ。子どもたちの漁業体験やファームステイな

ど観光の方を一生懸命やっていた矢先で、去年は1,300人ほど受け入れていたが、今は壊れた物を直す段階で、復旧に時間がかかる。

地区ごとに消防団の配置を

消防団の車を流され、多くの団員が被災したので、組織的な活動は皆無だが、地域ごとの消防団活動はこなせる。発災時は船の処置、水門を閉め、住人の誘導だけで余裕がなかった。

今は、家がないから、火災、津波の心配ないので、元の地域での消防団活動がない状況だ。入谷地区は健全なので、その消防団活動はあると思うが、町が復興しないといけない。消防団は再編というより復活しなければならない。山を切り拓いて作っていくときに、コミュニティをどう作っていくか。3分の1の町民が町外へ出るのではないかと問題がある。人口が減るということは活動の範囲も狭まるので、統合していかなければいけない。必要な資機材を備えても、活動が滞ってはいけない。適正な台数、団員数を確保していかなければいけない。規律訓練等をいつまでも放っておいては、若い人を育てるという意味で弊害もある。もう少し落ち着いたら招集がかかるのではないか。

家を建ててから仮設住宅を出ることになるが(多分2年では無理)、仮設は地区ごとにまとまっていないので、仮設では消防団が編成できない。役場の機能がやられてしまい、マニュアルを作っても神戸の教訓が活きなかった。お互い隣の町が



津波の凄まじさを見せつけている被災建物

マニュアルを作ったらよいのではないか。機械整備してからそこで組織を作り、防火できる。消防ポンプ車1台あれば、仮設の消火は何とかできる。集落ごとにまとめて、地区ごとに配置していけば戦力になるのではないか。制服、ヘルメット、長靴が必需品なので、再支給してほしい。できることから始める。日常の防災の根幹を担っているのは消防団である。

瞬時の避難の判断と高台移転

普段は災害弱者に声をかけてと言っていたが、家族だけで手一杯だった。避難は直感的な瞬時の判断であり、声をかけるにしても何秒かの判断で生死を分けたのだと思う。

志津川の小・中学校は高い所にあるからいいが、うちの地区は中学校は全滅し、避難所はみな津波にのまれた。被災した人はお年寄りが多い。お年寄りが「ここまでは来ない」と言って、若い人も一緒に避難しなかった。置いて逃げられない。昭和35年のチリ地震津波の時は、大したことはなく、水が静かで、潮が引いたので魚を拾い、津波が来たから逃げろと、一日中魚取りをしていた。水が引き、走って逃げられる、津波ってそういうものだと先入観があったので、今回は大きな被害になった。今回は車が追いつかれるぐらいの速さの津波だった。荒町は残ったが、荒町を除けば90%以上がやられ、残った家を数えた方が早いほどだ。人間は過ちを繰り返すから、高台移転しかない。高台移転をお願いしているが、大切なのは国が後押しするか否かだと思う。戸倉地区連絡協議会、南三陸町をよくする協議会もやっている。9月7日、“地震を忘れない、真心を忘れない”というキャッチフレーズで、復興計画提言書を出した。

昔からの人と人とのつながりが、すべての活動につながっていく。それを大事にしないと地域が崩壊してしまう。絆で人は結ばれ、変わり者も地域が包みこんでいる。地域があれば安心・安全だ。

津波により石巻消防団本部 身動きできず

宮城県石巻市石巻消防団

団長

門脇 政喜 (61歳)

消防団歴 36年 (不動産業経営)



石巻市の概要と被災状況

岩手県から流れる北上川が石巻市に入ったところで、二手（北上川と旧北上川）に分かれ、それぞれ追波湾と仙台湾に注いでいる。北上川流域は、肥沃な平野で仙台湾側の旧北上川の河口周辺が最大の市街地となっている。市の東部と牡鹿半島は、北上山地の最南端に位置し、リアス式海岸となっている。平成17年4月1日に石巻地域1市6町（石巻市、桃生郡河北町、雄勝町、河南町、桃生町、北上町、牡鹿郡牡鹿町）が合併し、市の総面積は555.78km²、人口は15万2,613人、世帯数は5万8,182世帯（平成24年2月末現在）である。

平成の大合併により誕生した石巻市には、旧1市6町をそれぞれ管轄する7つの消防団がある。消防団の構成名員は、石巻消防団（消防団員数490名、そのうち女性消防団員16名）、河北消防団（消防団員数367名）、雄勝消防団（消防団員数214名）、河南消防団（消防団員数417名）、桃生消防団（消防団員数266名）、北上消防団（消防団員数182名）、牡鹿消防団（消防団員数288名、そのうち女性消防団員17名）となっている。消防団の人的被害は、石巻消防団5名、河北消防団3名、雄勝消防団2名、北上消防団3名が殉職した。震災により多くの消防車両が被災したが、その後、寄贈を受け147台の車両で活動している（平成24年3月1日現在）。

なお、東日本大震災を契機に7つの消防団を統合し、平成24年4月からは石巻市消防団として市民の安全確保に尽力していく予定である。

東日本大震災では、石巻市の泉町で6弱、大瓜5強、門脇6弱、北上町6弱、鮎川浜6弱（平成23年3月30日気象庁発表）、相野谷6弱、前谷地6弱、桃生町6強（平成23年6月23日気象庁発表）を観測した。人的被害は、死者3,182人、行方不明者553人、負傷者不明、住家被害は全壊2万2,357棟、半壊1万1,021棟となっている。震災当時の人口（16万2,822人）に占める死者・行方不明者（3,953人）の割合は、2.4%となっている。

今回の活動記録は、旧石巻市を管轄する石巻消防団と、旧河北町を管轄する河北消防団の記録である。

情報がなく、 統制がとれなかった消防団活動

揺れた時は木造2階建ての1階にある会社の事務所にいた。ものすごい揺れで、ただ事ではないと思った。自宅は2階の壁は落ちたが原型は留めていた。すぐに活動服に着替え自転車で市役所に向かったが、訓練のように行かなかった。市役所4階の消防団室に来た団員は2名だけで、必要な時に集まらないのが大災害と実感した。

市役所に来てしばらく経ってから、15時40分～

50分くらいの間に津波の第2波が来て市役所周辺も浸水が始まった。さすがに自宅が心配になり一度戻ろうとも考えたが、浸水で外に出られる状態ではなかった。

あの日に限って季節はずれの雪が降った。最初のうちは、現場の各分団と情報交換し、報告を受けていたが、断片的な情報しかなく、はがゆい思いをした。電話も携帯電話も使えず、消防団用無線機も通信エリアが狭く、防災行政無線が唯一の連絡手段だった。このような大災害は経験がなく、考えさせられることがいっぱいあった。消防団用無線機はもっと広範囲で使用できるものになければならない。

市の防災対策課に被害の情報は逐一入ってくるので、消防団室と行き来していたが、それ以外はテレビの情報が主で、仙台市の荒浜地区の被害等を知った。当日から翌日にかけて、牡鹿半島の方は全滅のようだという情報も入ってきた。断片的な情報をつなぎ合わせると、想像を遥かに超える被害を受けていることがわかった。門脇小学校から命からがら逃げて来た人が、携帯電話で撮った門脇町や南浜町の被災状況や、家が何軒か燃える映像を見た。まるで映画でも見ているようで、これはどうにもならないと思った。市役所の窓から南浜町の火災も山の陰から赤く見えていたが、消火作業に指示を出すことはできなかった。

災害の規模があまりにも大きく、連携しようにも浸水により車両が通行できず通信手段もないことなどから、各分団が分団長の決断により個別に行動しなければいけない状況であった。被害の少ない地域から応援部隊を回すことができず、震災当日から3日くらいまでは現場サイドに任せるしかなかった。私が指示できるようになったのは、水が引いて現場を回れるようになった4、5日目からだったが、瓦礫等で道路が寸断され、行くことができないう地域もあった。



瓦礫と化した門脇地区。左端は全焼した門脇小学校

広域津波火災への対応

津波の後に、様々な地域で火災が発生し、16時前後から火災情報が入り出した。門脇町の火災では、発災当初から地元の分団が消火活動にあたった。門脇小学校の背後にある日和山にとにかく火が移らないように消火にあたった。南浜町はほぼ壊滅状態であり、市は周辺住民に日和山にある高等学校への避難指示を出し、地元の分団が避難誘導にあたった。結果的には門脇町も壊滅状態となった。消火活動中に助けを呼ぶ声が聞こえても助けることができず、身内でも手を放さざるを得なかった人もいた。火に包まれた家や車が押し寄せ中、命からがら逃げられた人はいいが、火災、津波に巻き込まれた人は相当な数で生死は紙一重だった。

門脇町の火災はなかなか消えず、鎮圧の報告が出たのは10日後で、完全に火が消えたのは15日後のことだった。消火は交替で行ったが、団員は休憩中も現場に待機していた。消防団は消防署員と連携し消火活動にあたったが、火が消えるまで消防署員も長期に渡り現場対応を余儀なくされた。瓦礫等により進入できずに自然鎮火となった所もあった。

比較的被害が少ない井内地区の分団が開北橋を渡って間もなくの場所に待機していたので、水没した住吉地区の排水作業に行くよう要請したが、消防ポンプでいくら水を揚げて排水しても効果がないと判断し断念した。国土交通省の排水ポンプ

車が到着し、作業に当たってから徐々に水が引き始め、本格的に引いたのは4月の5日か6日だった。

市役所の災害対策本部会議

3月11日夜8時に、石巻市災害対策本部会議を行ったが、市長は出張先から浸水により庁舎に戻ることができず参加できなかった。市長は、被害の無かった石巻赤十字病院に待機し、防災無線により市の幹部に指示を出していた。災害対策本部会議には総括団長が出席することになっていたが、地元の現場対応のため出席することができなかったため、私が出席することとなった。消防出張所の救急車と消防車はすべて流失といった情報は入ってきたが、消防団からは断片的で正確な情報がなかなか掴めなかった。当日の夜に庁舎が浸水により完全に孤立していることを実感した。災害対策本部会議では、食糧や燃料が不足しているといった現場の消防団の要望を主張した。燃料不足は本当に大変だったが、消防団活動のため優先的に給油してもらい助かった。

震災当日と翌日は一生懸命でよくわからなかったが、夢中だったせいか空腹も感じず、トイレにも行かず、2日くらい飲まず食わずの状態だった。外で救助を待ち続けている人が低体温症になると命が危ないので、皆とにかく必死だった。3日目に何も食べていないことに気づいた。3日目もほとんど水だけだったが、黒鮎をもらって舐めた時の美味しさは今でも忘れられない。

市役所庁舎には市民もだいたい避難しており、2階、3階は避難者で溢れ、わずかにあった備蓄はすべて避難者へ回したため、職員の食糧はなかった。苦肉の策だったが、市職員が軽い木をつなげていかだにしたり、机をつなげて橋を作り、山の上の避難所に食糧を運んだりした。食糧は、自衛隊から少しずつ来るようになったが、非常食のご飯だけで、おかずはなかった。

会議は朝6時、夜8時と毎日続き、私も庁舎に

寝泊まりした。会議は5月に入っても毎日続き、3か月経った100日目をめどに、週2回の会議となった。消防署員や新潟からの緊急消防援助隊と一緒に消防団室に寝泊まりした。電気が復旧するのも3、4週間かかり、水道はその後だったから風呂にも入らず、面倒で髭を剃る余裕もなかった。職員も髭を伸ばしている状態が当たり前になっていた。

消防団の勢力が割かれる中、 長期にわたる搜索活動

石巻消防団で7名、石巻市全消防団で27名の団員が死亡した。沿岸部では団歴が5年未満の若い団員が水門閉鎖活動中に亡くなっている。他にも消防車で巡回中、避難誘導中、詰所に向かう途中や、いったん親や妻を避難させてから残された住民の避難誘導に戻り、帰らなかった団員もいた。甥は足の弱い人を救助に行ったまま亡くなった。大災害の時には要援護者を助けるよう団員は訓練されているので、地域の繋がりが強い沿岸部の集落であればなおさらだろう。

石巻消防団の消防車は3月25日時点で、2、7分団と、牡鹿半島に位置する10分団がほぼ全滅。62台のうち、24台が使用不能になった。津波被害が少ない3分団の蛇田地区と、5、6分団の井内地区に1台も被害が無かったのが救いである。

一部の自衛隊は2日目から、3日目には自衛隊のヘリが救助にきた。本格的な救助活動は4日目からで、市役所庁舎周辺の自宅2階に孤立していた人が救助された。震災当日から必要としていたボートは、被害の無かった釣り具店から市が調達した。

震災当日から多くの遺体があがったので、消防団は遺体の搬送も行った。本来の消防団の活動ではないが、そういうことを言っていられない状況だった。

落ち着いてからは、遺体搬送等を警察に任せることになり、消防署、自衛隊、消防団は搜索活動

を行い、警察が遺体の確認作業にあたった。牡鹿半島地域の団員は道路確保のために自ら重機を操り、消防車で急病人や遺体を搬送した。地域により活動は異なるが、今回の震災では消防団は本当にいろいろな活動を行った。

石巻消防団の管轄地域は工業地帯があるので、飼料や化学薬品が流れ、冷凍食品の魚が溶け、水たまりの水は黒くて異様な臭いがした。水が出ないため、水たまりで手を洗ってしまい、手が荒れた人や破傷風になった人が大勢いると聞いた。団員には水たまりで手を洗わないように、必ず支給された水を使うよう徹底した。また、しばらくは土埃などで常に大気に色がついているような状況だった。

消防団の活動は未だに続いている。警察、消防署、自衛隊との一斉捜索の際には消防団も参加しており、団員自身が被災者でありながら、団員には本当によく活動してもらった。分団単位では継続的に捜索しており、特に行方不明者が多く出ている牡鹿半島の分団では毎日捜索し、一部では瓦礫の撤去等にも協力した。

自宅全壊も消防団活動を優先

私の自宅は市内の大街道南5丁目という地区にあるが、三陸地震やチリ地震津波をはじめ、今までに津波が来たという記録は残っていない。民生委員をしている家内は、使命感で独居老人の家の安否確認をしているうちに津波が押し寄せて、自宅2階の外階段に夢中で駆け上がり助かることができた。家内には3、4日会えず、携帯電話はここぞという時に全く機能しなかった。

自宅に一時帰宅できたのは、3日後の夕方過ぎだった。市役所庁舎周辺も浸水していたので、職員がテーブルをつなげた橋から反対の山側に脱出し、山を越えて自宅に戻ることができた。普段の大街道地区は車が渋滞するが、車は1台もなく、目つきの悪い人が数人歩いていた。コンビニエンスストアの商品はほとんど盗まれていた。震災後



石巻市日和山から見た津波の被害状況

3日目、4日目は本当に厳しい状態だった。

自宅は海から1.5km～2kmくらい離れているが、破壊力がだいぶ弱まった第3波の押し波でやられたようだ。家具の倒れ具合から見ると、津波は一方から入って、洗濯機の中のように渦を巻き、海水に浮かされた家具が折り固まって、パズルのようにグチャグチャな状態になっており、ただ呆然だった。事務所の物は全て、パソコン、コピー機、電話はもちろん、ありとあらゆるものが全て駄目になった。仕事の方は震災から1か月を過ぎた頃からようやく取り掛かり、消防団で親交のある工務店や電気工事業者に自宅の修理をお願いしたが、全壊の状態のため解体した。消防団長の仕事为主で、自分の仕事は副となっていた。

水が引いて4、5日目に被災状況を見て回った時は、団員が皆それぞれ一生懸命活動している姿を見て感激した。自分たちの地域は自分たちで守るという思いを強く感じた。また、石巻市職員の住民を最優先とした活動には感心した。職員は自宅にも帰れず、大川小学校付近に自宅があった前部長は、母親や奥さんが亡くなっても帰らなかった。他にも家族が亡くなった職員がたくさんいたが皆帰らなかった。異常事態だったが、職員が頑張っていたから私も頑張れた。いろいろなことが多過ぎてずっと昔のことも感じる。

今回の震災では各消防団が独自の活動を取ってきたが、今回の震災では各消防団が独自の活動を取ってきたが、平成24年4月の消防団統合後は連携を取り合い、市民の期待に応えられる消防団活動を展開していきたい。

涙は3日だけ、 あとは強い絆に感謝

宮城県石巻市河北消防団

団長 **遠藤 宏** (52歳)

消防団歴 28年 (運送業)



宮城県沖地震に備えて

石巻市河北地区は北上川の河口付近に位置している、水害の常習地帯ではある。宮城県沖地震に備え、10年くらい前から地震を想定した訓練をやっており、消防団でもそれなりのマニュアルを作って地震発生に備えていた。震災の1週間後には、大川小学校で宮城県沖地震に備える6.12の準備会の避難誘導訓練をするところだった。このあたりの集落は海から直線で4km離れていて津波避難マップでは安全地帯になっていることもあり、まさか津波が遡上して来るとは思っていなかった。訓練も裏山ではなく近くの高台への避難であり、マニュアル自体がなかった。児童らが震災後に向かった新北上大橋のたもとと唯一の高台で、大川小学校より5、6m高い所にあった。

震度5強以上の地震があると、河北総合支所(以下「支所」)に対策本部を立ち上げ、副団長以上が集合、分団長は各地区の被害状況を確認後集合することになっていた。

待てども集まらない現地の被害情報

震災当時私は副団長で、7月の改選で団長になった。仕事は運送業で、震災当日は登米市津山町の採石場にいた。揺れが尋常でなく、落石もずい

ぶんあった。とにかく支所に行こうと思い、途中、国道45号線は山崩れの落石で通れなかったのを撤去しながら、支所に何とか到着したのが15時10分頃だった。

支所からの大津波警報の放送(14時52分)は聞こえず、ラジオで大津波警報が出たのを聞いたが、こんなに高い津波が来るとは思わなかった。その後、団長も駆けつけ、すでに、支所職員6人が車3台で津波危険のある釜谷地区、長面地区に向かっていたので、情報を待とうということになったが、電話も何も来ない、安否確認も取れない。一応待ったが、日没で全然連絡が取れなくなった。

結局、大川小学校付近の釜谷地区では、169人死亡、24人行方不明の計193人(平成23年9月現在)、海側の長面地区では死亡と行方不明を合わせて105人くらいなので、住んでいる人数はさほど変わらないが、海側の方が人的被害が90人くらい少なかった。海側はむしろ津波を警戒しているが、海より遠い釜谷地区の犠牲者が一番多かった。地盤沈下も大きく、地震で全体的に1m下がった。

大川小学校までの道路を 切り開いて救助・捜索活動

支所前の川の橋桁1m下まで水がきた。夕方4



大川小学校の児童が避難に向かう予定だった海から約4 km上流の新北上大橋周辺を遡上する津波（撮影した映像は、提供した記者を通じてyou tubeで流れた。撮影した時はまだ橋も残っていた。）

（撮影／宮城県石巻市河北総合支所職員）

時頃、テレビで仙台空港に津波が上がるのを見て、こっちも完璧に早く上がっていると思ったが、情報が集まらない。自分が行くことにして、トラックで海側に下った。川から溢れた瓦礫、流木が上がっていて、途中で何回も川を上がってくる津波の黒い壁を見た。何とか車が通れて福地水門まで行ったが、雄勝町の住民などの車が100台近く溜まっていて、団員が交通誘導していたが、先に行けなかった。暗くなって夜になったから、自主防災会で炊き出しを100食くらい出した。

支所との間を何回も往復して、21時頃になり、橋が何とか渡れるという未確認情報があったので、四駆のジープで行き、北上町側の北上大橋が流されていることがわかった。その時も道なき道を、水に浸かって帰って来たので、11日夜、私の独断だったが、地元消防と、集められるだけ船を集め、とにかく釜谷地区に渡ろうと決めた。あの時はそうせざるを得なかった。

歩いてでも、行こう、行こうとする。0時から2つある製材屋のリフトで、団員が瓦礫撤去をし、1台が水没したが、津波警報がまだ解除になっていないから戻せない。次の集落の横川地区まで、夜中の2時過ぎまでに瓦礫を撤去した。横川地区は水没は免れていて、団員が19時頃から瓦礫を撤去していた。これ以上はさらにひどい状態だから夜中は無理、後は明るくなってからと言っていたが、団員の子どももいるので、どうしても大

川小学校に行きたいとなって、その後も、夜通し団員が重機を使って大川中学校までの瓦礫を撤去した。ここで団員が交通規制をかけた。

3月11日の夜、福地地区では、夜12時頃公民館・生活センターを解放した。避難者は120人くらいいたが、石巻から雄勝に戻るルートなので雄勝町の人が多かった。3月12日朝に、さらに石巻市河北総合センター（ビッグバン）に移動した。

遺体安置より優先した生存者の救助

自分と今野部長2人がまず大川中学校まで車で行き、その先の大川小学校までは道路がなくなっていたので、膝下くらいの水位をはまりながら歩いて行った。釜谷集落では140軒がひとつもなくなっていて、学校と診療所の鉄筋コンクリートの建物が2つしか残っていなかった。

大川小学校に着いたのが翌12日朝6時半頃だった。その時点では、大川小学校で子どもたち60人～70人が2階に避難しているという情報だったが、三角地帯に立った時点で目の前に現れたのは、瓦礫や流木にはさまれたりした遺体や、橋のたもとには誰かがブルーシートをかけた3体の小学生の遺体、小学校の鉄筋の2階の屋根の上まで瓦礫が乗っているなど背筋が凍り付くような光景だった。ハンドマイクで、「おーい、誰かいないかー、誰かいないかー」と何度も呼べど叫べど、返事がなく、空しく自分の声が響いた。

学校の校舎側に車がかなり押し寄せられていたので、正直のところ、支所職員も皆亡くなったと思った。それで、もうこの学校に生存者はいない、遺体収容は後にして山狩りの搜索と判断し、今野部長とふた手に分かれて生存者を捜しに向かった。雄勝方面も水没していて、行く途中、近くの高齢者9人や、足をくじいた目の見えないお祖母さんなど、ここだけでトータル50人以上を救助した。

途中立ち寄っていた大川中学校では、先生11人と近所の人1人の12人が避難していたが、胸のあ



校舎の屋根まで瓦礫が乗った大川小学校

たりまで水があり近づけないので、その後に来た宮城県警にヘリの要請を頼んでいた。が、待てど暮らせどヘリが来ないので、午後になって、浮いている瓦礫を全部警察の方に除去してもらってから、避難者に胴長を持って行って履いてもらい、土手伝いに歩かせて1人ずつ救出した。

我々は水の中を歩いたが、釜谷地区あたり一帯はすべて水没して沼だか川だかわからない状態となっていた。そんな800m～1km弱くらいの間を住民に歩かせるわけにいかない。道路という道路がだめで船しかなく、行く前に船を手配していた。何とか残っていた河川用のしじみ取りに使っている5隻の船を借りた。団員は船外機操作の免許を持っている。定員6人くらいの船外機を車に積んで、瓦礫でいっぱいになった道路をなんとか通って運んできた。まだ津波のことを考えると恐いので、北上川には船を出さず、水深2mあった反対側の田圃の上に降ろし、農協の建物の横の倉庫脇に船着き場を設けた。

生存者の避難誘導と船による搬送

警報は解除になっていないから本当はいけませんが、12日朝5～6時くらいから船外機で移動し始めた。雄勝町の人など避難者30人、長面地区などから団員が集結させた50人くらいの人、小学生の中には避難時に流木で目をぶついたり、腕を打撲した子どもが2人いた。その他にも、透析患者2

人、歩けない人、持病の血圧の薬を流された人、体調が悪い人がいた。怪我人や病人を優先し、コンパネや集会所のテーブルに乗せて、船着き場まで連れてきた。常備消防の河北消防署は、車に全く被害がなく来てくれたので、広域消防無線で連絡して、船で運んだ先に手配してあった救急車で搬送した。その他の人は、消防団の積載車などで石巻市河北総合センター（ビッグバン）までピストン輸送した。日没後は危険を伴うので、12日は50人くらいを日没前に運び切った。テレビの報道では、この救助活動を自衛隊がしたことになっていたが、自衛隊が来たのは1週間後で、我々消防団がやったことだ。

12日に避難を呼びかけに行っていた支所職員と合流し、支所職員が孤立していた周辺の集落にいた方々にも呼びかけ、14日までに300人くらいの相当な人数を船で運んだ。13日には、消防団の積載車11台全部で、大川中学校から石巻市河北総合センター（ビッグバン）までピストン輸送をかけた。団員が170名になった14日は、団員をバスで搬送し、全員が遺体収容に回った。常備消防は、陸路を使って孤立集落の救助に回り、水があった長面・尾の崎地区で残っていた人は3、4日目にヘリで救助された。

大川小学校の生存者搜索活動

河北消防団の170名～180名の全団員に13日に集合してもらい、小学生の搜索に当たった。我々はそんなに山奥まで逃げるはずがない、林道があれば林道沿いにしかいないと考えた。雪が降ったから足跡が結構あった。その頃は生存しているものと思って、13日～14日の2日間、山狩りに当たった。遺体収容が主になってしまったが、13日～15日から1週間くらいは1日の遺体収容数が30人くらいあり、警察だけで収容するのは無理なので、新北上大橋のたもとの三角地帯を遺体収容所にして、ブルーシートや現場で作った担架で団員が運んだ。



流木や瓦礫の中で捜索活動をする消防団員

12日の時点で、広範囲の被害だからとにかく重機をすぐ手配しないとイケないと思った。団員の中には有資格者もいっぱいいたし、重機を手配する団員もいた。13日に重機5台、キャリアカー1台を消防団が手配し、市に事後報告した。誰かがやってくれ、しかも早かった。機械で瓦礫を撤去し、その中から遺体を収容した。そのうち建設協会でも手配してもらい、最終的には重機は、一番多い時で15、16台以上あった。流木を切るチェーンソー部隊のような人を頼んだりして、この河北地区では結構早く遺体収容ができたはずだ。

震災後、団員とずっと一緒に活動していたが、団員の中には親や、奥さん、子どもが亡くなった団員もいて、一人きりになった人もいる。最初、小学校があまりの惨状で、子どもが亡くなった団員には、正直に状況を言えず、最初の1、2日は連れて行かないという“気使い”しかできなかった。無理するなど言っても、まだ発見できていない人もいるからと言って、一緒に活動することになったが…。

遺体の収容と処置

やっぱり、どうしても早く、1日でも1時間でも早く捜したい、2日後くらいからは早く親元へ返したいという気持ちだけで団員は動いた。大川小学校には20日以上、消防団が何百人も入って、あくまでも人を捜すため、ほぼ人はいないと確認

できるまで、せめてもの活動を行った。

遺体収容は消防団のやることではないが、団員の子供や顔見知りの子供も相当亡くなっていたので、位置出しだけでは忍びないということになった。その当時、警察や自衛隊が何百人も来ていれば別だが、遺体だらけで、まともな遺体だけではなかったが、やらざるを得なかった。ましてやここでは、家族がいつ遺体が搬送されてくるかと待ち続けている。

遺体が運ばれて来ると、前団長が確認しやすいようにご遺体の顔を全部拭いた。遺体を収容する袋もなかったので、消防団がビニールシートなどを用意した。警察が搬送するトラックに積みきれず、地元の方も、軽トラックで搬送してくれた。

遺体の数が多くて、暖かくなってくると土葬しかなかった。山の方に仮土葬したが、最初搬送を手伝ってくれていた自衛隊も、埋葬は自衛隊の仕事でないと途中から撤退した。

団員は、最初の1週間から10日くらいは結構人数が来て、捜索に当たってくれていた。10日過ぎ頃からは80人体制くらいで3月いっぱいはやった。私は4月30日までは休まなかったが、4月からは少し規模を縮小して、遺体収容・捜索は4月30日までやった。5月と6月をまたぐ土日、大川小学校のこの山際からずっと長面地区まで6日間かけて全部再捜索をした。この間は、県警と一緒に富士沼に船を5隻出して鉤を作って、120人くらい出て捜索した。

大川小学校の児童数は108人で34人生存、70人死亡確認で、4人がまだ行方不明。教職員は13人のうち助かったのは3人で、その内小学校にいて助かったのは1人。9人死亡確認で1人行方不明(平成23年9月現在)。8月28日までの捜索で、延べ4,800名の団員が活動した。

自衛隊との連携

最初の災害対策本部会議で自衛隊派遣要請をすぐ決定したが、先発隊が3日目頃、ヘリコプター



搜索活動に向かう消防団の車列

も来たが、到着が遅かった。自衛隊は1週間後に来て延べ何万人と地区に入ったが、もう少し現場にあった作業をしてほしかったと思う。遺体を見つけたのは1 m下からだったが、自衛隊はずっとスコップの手掘りでやっており、最後は大型機材を調達した。

支所の災害対策調整会議には、支所長、次長、警察、広域消防、自衛隊と10人前後が参加し、毎日午後6時からの会議で翌日重機を回す場所等を割り振っていた。翌日の段取りをすべてした後、自衛隊が釜谷地区の600人で一斉搜索をすると、団員が除けられたこともあった。県警も同様の一斉搜索があった。消防団だけで被災者の救助と搬送を自主的に行い、念入りに搜索活動をやった後を自衛隊が入ったりしたので、我々消防団では入れない沼など手が入っていない所の搜索をお願いし、最後にはやってもらった。

涙を流したのは3日間だけ。 あとはもう感謝

河北消防団の4つの消防分団が地震発生時に集まる詰所が大川小学校の裏の釜谷地区にあった。もし夜だったら小学生の犠牲は少なかったが、消防団は壊滅した可能性があった。第4分団の被害が大きく、団員の犠牲は、8名死亡（3名入団予定者、5名現団員）で（平成23年9月現在）、石巻市で地震に遭って、祖父母の安全確認に自宅に



当日の搜索活動の説明を受ける消防団員

戻って津波に飲まれた人も多い。消防、設備、施設、団員を補給し、震災前に戻す必要がある。団員確保から始めないといけない。規律訓練など訓練は必要で、操法大会や水防技術大会に出たのは役に立った。

また、どこでどういう災害が発生したか把握できなかったのが一番問題だった。ここは地理的に平坦地ではなく、今のデジタルは飛びが悪いので、アナログの消防団用の消防無線がほしい。ポンプ車が1台もないのでほしい。燃料が困ったので、備蓄などできるようになると良いと思う。

この震災で人的被害も多かったが、学ぶべきものもあったし、学んだことも多かった。いいも悪いも、人の気持ちがすっきり、すべて見えた。団員に関しては悪いことはないが、最初はずいぶん涙を流したが、悲しい、かわいそうだという涙を流したのは3日間だけだった。あとはもう感謝、感謝だった。励まされたりするとやっぱり涙腺がゆるむ。電話、携帯電話も釜谷地区では10日くらい繋がらなかったから、自分も死んだことになっていたのも、みんなに励まされた。

震災を経て、消防団のまとまり、団結、何でも、“絆”は強くなったと思う。

命を奪い去っていった津波に 激しい憤りがこみ上げた

宮城県女川町消防団
第3分団 副分団長

川添 文 (72歳)
消防団歴 38年 (縫製業経営)



女川町の概要と被害状況

女川町は、宮城県東部の牡鹿半島基部に位置し、太平洋沿岸面した日本有数の漁港である女川漁港があるほか、女川原子力発電所が立地することでも知られる。人口は8,376人、世帯数は3,417世帯（平成24年2月29日現在）である。

女川町における東日本大震災による人的被害は、死者575人、行方不明者340人、負傷者不明、住家被害は全壊2,923棟、半壊347棟であった。

女川町消防団は、1本部7分団233名で構成されている（平成22年10月1日現在）。第3分団は、浦宿浜、針浜、旭が丘地区を管轄している。

まず高齢家庭の安否確認

3月11日はいつものように、自宅隣の作業場で5人の女性従業員とともに女性服縫製の作業をしていた。途方もない激しい揺れだった。揺れが収まったところで、いつも送り迎えをしている従業員2人を自宅まで妻に送るように言い、自分の車で通勤している残る3人もすぐに帰宅させた。

同時に自宅から100mほど離れた所にある詰所に駆けつけた。すでに2名の団員も来ていた。消防団として取り組むべきことを3名で話し合った。まずは近くに居住する独り暮らしの高齢者や

年配の夫婦二人暮らしの家、三十数軒を3名で分担して訪ね、けが人が出ていないことを確認して詰所へ戻った。

そのころ、従業員を送り届けた妻も帰宅していた様子だった。普段は送り届けて戻るのに10分もかからない道のりに15分以上かかっていた。避難する車、帰路を急ぐ車で渋滞が起き、数珠つなぎになっていたのだ。

ちょうどその時、女川町の防災行政無線から大津波警報が流れた。最初は女性の声だったが、続いて男性の声が「早く高台に逃げろ」と、語気強く絶叫していた。この後、防災行政無線は切れた。電気はつかず、電話も通じなくなっていた。この時点では第3分団へ指揮伝達はされていなかったが、私は自己判断で、2名の団員と手分けして、3名で7基ある水門の閉鎖に走った。

第3分団の団員は総勢38名だが、このうち浦宿班は11名で、5名は勤務先が地元から離れているサラリーマンである。非常事態が夜間に発生すれば全員集合できるが、有事が昼間だと、一緒に行動できるのはいつもこの3名だけである。情報収集の手段をすべて奪われて、あとは手探り状態。3名は、自分たちの目にした状況を頼りに行動するしかなかった。

女川町の地形は複雑だ。牡鹿半島の根っこ部分を挟んで東側には女川湾が太平洋に直接ひらけているのに対して、西側には太平洋に背を向けたかたちで万石浦がある。自分たちが生活する浦宿地

区は、その万石浦に面している。チリ地震津波や昭和三陸沖津波の時には、女川湾沿いの一帯は浸水被害が大きかったのに、浦宿地区まで水は到達しなかった。過去に大きな津波の被害を受けなかったことが、今回の津波に対する警戒心を薄めていた。

背後から攻め込んだ津波

「ここは大丈夫だ。津波なんか来るわけない」

浦宿地区の住民のだれもがそう思っていた。だが、予測すらしなかった津波が、女川湾の方角から登り坂を遡って国道398号沿いに浦宿の方へ一気に押し寄せてきた。詰所から、その様子が確認できた。JR石巻線・浦宿駅の辺りは小高くなっている。津波はそこを乗り越えて迫っていた。じわじわ、という感じで、凄まじさとか脅威とかは感じられなかった。濁った水の中を乗用車が、瓦礫が、どんどん流れてきた。人を乗せたまま流れ着いた車もあれば、無人の車もあった。帰ったはずの従業員の車も押し戻されてきたのを見た時は驚いた。従業員を送り届けた妻も一瞬遅れたら、どうなっていたかわからない、と思ったらぞっとした。

一方、目の前の万石浦は波も穏やかで変化はない。正面の万石浦ではなく、後ろ側の遠く離れた女川湾から津波が攻めてくるとは思いもよらなかった。裏をかかれた感じで、これはただ事ではない、と体の中に緊張が走った。浦宿駅のところで



早く高台に逃げる

せき止められるように流れ着いた車や瓦礫がたまっていた。車の中から大慌てで抜け出してくる人の姿も見えた。その時、電車は通っていなかった。

浦宿駅のそばに石巻線の踏切があり、その近くの少し高くなった場所に建っているコンビニエンスストアの店舗に、凄まじい量の瓦礫や車が吹きだまったように折り重なって集まっていた。なにを言っているのか聞き取れなかったが、悲鳴のような叫び声も聞こえた。コンビニエンスストアの建物自体は崩壊していなかったが、硝子戸や窓ガラスは砕け散っていた。瓦礫の中には、家屋の大きな梁のようなものも混じっていた。凄まじい光景に、「いったい何なんだ、これは」と、ただただ啞然とするだけだった。

まるでテレビか映画を見ているようで、とても現実とは思えなかったし、思いたくもなかった。4階建ての女川町役場も水没した。中にいた職員たちは、屋上に駆け上がって辛うじて助かった。今は仮庁舎で職務を続けている。仮庁舎へ通じる道路や周辺の地盤は沈下して、満潮になると冠水状態が続いている。

消え失せた見慣れた風景

我が家には庭先まで海水が迫ったが、浸水は免れた。しかし、隣の宅地では液状化現象が起きて汚水がせり上がっていた。浸水による被害が大きかったのは、第2波の時だったことが後でわかった。水が引き、ひと段落したと思われるころを見



現実とは思えなかったし、思いたくもなかった

計らって、通行の妨げになっているような瓦礫だけでも除去しよう、ということになった。

作業を始めると、地元の人たちも手を貸してくれた。足の踏み場もないような状況だったので、協力はありがたかった。相変わらず連絡は取れず、町役場がどうなっているのかが、気がかりだった。道路は車が走れる状態ではなく、連絡を取り合う手段は、徒歩しかなかった。津波に洗われて瓦礫が散乱した国道に沿って、町役場をめざして歩くことにした。見慣れた道路沿いの風景は一変していた。

宮城県立女川高校から100mほど女川湾寄り、ちょうど女川湾を見通せる辺りまでたどり着いて仰天した。見渡せる限りの建物が、いっさい消え失せているのだ。あっ気にとられた。呆然として夢を見ているみたいだった。自分でも驚くくらいに、気分は高ぶっていなかった。想像を絶する変容に感情がマヒしてしまったのかもしれない。消防団員でありながら、我を忘れていた。そこから先は瓦礫が積み重なって、とても前へ進める状態ではなかった。

女川町役場に行くことは断念した。さて、この先、どんな消防団活動をすればよいのか。連絡が取れない以上、自己判断するしかない。自分たちの分団、自分たちの班の管轄区域のことだけを考えることにした。

暗くなってきて、雪も降り出したので、途方に暮れている被災者たちに声をかけて高台にある避難所の女川町立女川第一小学校に行くように指示した。私も避難所の様子を見に行ってみた。自宅



消防団員でありながら、我を忘れていた

を津波にさらわれた人もいて、体育館の中は高齢者から子どもまで、200人を超える人たちがごった返していた。

寒さは募るのに暖をとるすべがない。外は雪が降りしきっているのだが、校庭に瓦礫の木材をくみ上げて、たき火をするしか方法がなかった。提供された毛布にくるまって寒さを凌いだが、だれも眠れる状態ではなかった。避難所には行政区のリーダーたちもいたので、あとを託して私たちは引き揚げ、3月11日の活動を終了し、いったん解散した。

眠れぬまま、ラジオの情報に耳を傾けた。聞けば聞くほど、被害の大きさが自分たちの手に負えないほど途方もないことだと気付いた。とにかく、水道が復旧するまでの間、被災者たちのために水を確保しなければ、と沢の水まで探しに行った。食糧の入手にも奔走した。

避難袋を背負った遺体も

そんな最中に、入院中だった私の身内が重篤状態になった。見舞いに駆けつけて驚いた。被災して体調を崩したり怪我をしたりした患者たちがあふれかえって、ベッドが足りずに床に毛布を敷いて横たわっていた。まるで、野戦病院さながらだった。身内の容体は持ち直したが、医師も看護師もほとんど飲まず食わずの状態での診療にあたり、患者にも満足な食事は届けられなかった。

町の災害対策本部から、待っていた指示が出たのは3月18日になってからだった。最初の任務は、行方不明者の捜索だった。救援にやってきた自衛隊に協力するかたちで参加した。浦宿地区を含む第3分団の管轄区域には不幸中の幸いで、死者や行方不明者はいなかった。そのため、隣接する第1分団の管轄区域を中心に捜索活動を着手した。

女川町の消防団組織は7分団あるが、第3分団以外は消防団としての活動を続行できないほどの甚大な被害を受けていた。団員自身にも7名の犠

犠牲者が出た。だから、女川町全域にわたる実質的な捜索活動は第3分団が中心になった。

犠牲者が発見された時の状況はさまざまだった。樹木に引っ掛かっていたり、丘の途中の斜面に放り出されたようになっていたり……。どの遺体にも、なすすべもなく津波に翻弄された痕跡がまざまざと残っていた。流される途中で流木や瓦礫にもみくちゃにされたりぶつかったりしたのか、どの遺体にも無数の傷がついていた。

小学生低学年くらいの子ども1人に両親、祖父母の、おそらく家族と思われる5人が中に閉じ込められたままの軽乗用車も見つかった。車内には泥も入り込んでいて、車外に1人ずつを引き出すのも一苦労だった。一家で避難する途中で、津波に飲み込まれたのだらうと思うと、いたたまれない気持ちになった。

よくもこんなに狭いところに挟まったものだ、という場所で見つかった無残な遺体もあった。おそらく猛烈な勢いの引き波に押しこまれたのだらう、もがき苦しみながら命を失ったに違いない、と想像された。

非常用食糧や医薬品を詰めた避難袋を背負った姿の遺体もあった。避難して必死の思いで生き延びようとしたに違いない。なぜ、こんな目に遭わなければならないのか。一生懸命に生きようとする者の命を無残にも奪い去っていった津波に対して、激しい憤りがこみ上げた。

女川湾には漁船に補給するための燃料用重油タンクが何基も並んでいた。津波は、そのタンクをなぎ倒して上陸した。だから、女川町の浸水地域



津波が襲う女川湾（女川町提供）



役場庁舎（女川町提供）

は、流れ出た重油で油まみれになっているところが多かった。ヘドロに埋まって、泥人形のようになって見つかる遺体もあった。

寒空の下で行った遺体の搬送、遺体安置も納得できる対応ができなかった。それが心残りだった。たとえ毛布1枚でも、なにか暖かなものでくるんであげたいと思っても、それが手に入らない。濡れた遺体を、被災場所で拾い集めた濡れたままの毛布や布団に寝かせて運ばなければならず、ほんとうに情けなかった。

見つけるたびに耐えがたいほどの辛さを味わった捜索活動は、4月22日まで続けた。この日、和歌山県の緊急消防援助隊100名が駆けつけてくれた。発見される遺体が少なくなってきたこともあり、自衛隊との捜索活動は和歌山県消防隊に引き継ぎ、23日以降は地元消防団としての本来の活動に復帰した。

大地震・大津波による被災と闘う中で、自分はそのどや気管支をすっかり傷め、体重も1カ月余りの間に4kgも減った。女川港には漁港として冷凍倉庫も整っているが、それが軒並み、津波の直撃を受けて破損した。春とはいえ、東北地方の3月から4月上旬にかけてはまだ気温が低い。にもかかわらず、冷凍庫内にあった魚介類や水産加工品は腐敗が進み、地域を覆う悪臭との闘いも尋常ではなかった。

管内住民から犠牲者がいなかったのが せめてもの救い

宮城県女川町消防団
第5分団桐ヶ崎班 班長

鈴木 義光 (58歳)
消防団歴 26年 (養殖漁業)



悪夢のような光景に動転

3月11日、私は用事があって石巻に向かって車を運転していた。突然、ものすごい揺れを感じた。車を道路脇に止めて、揺れが収まるのを待った。カーラジオが地震情報と津波警報を伝えていた。5分間くらいは揺れていたのだろうか。とにかく、ずいぶん長い時間であったような気がした。最初5、6mの津波であった情報は、次に10mの大津波と訂正された。

「これは半端な地震じゃないぞ、ただ事ではない」

そう判断して、すぐさま車をUターンさせると、無我夢中で来た道を引き返した。信号機がどれもダメになっており、事故を起こさぬように運転は緊張した。女川町内を抜けて、Uターンしてから20分ほどで地元の桐ヶ崎地区に入った。自宅には戻らず、海を見下ろす高台へ直行した。

そこには近所の人たちの半数くらいがすでに避難して来ており、私の家族も混じっていた。同僚がポンプ車を高台まで運び上げてくれ、団長と2名で管轄区域の人たちに対する避難誘導も済ませた、と知らされた。その後、念のため同僚と2名でもう一度、避難の呼びかけをしながら管轄区域内をひと巡りして高台に戻った。その時は住民のほぼ全員が高台に集合していて、ひと安心した。

桐ヶ崎班の団員3名のうち1名は会社勤めなので、平日の昼間の活動は困難で、いつも同僚と2

名だけとなる。

津波が実際に押し寄せる様子も、高台から確認できた。15時20分くらいだった。寄せ波はじわじわと迫ってくる感じであまり脅威は感じなかった。しかし、引き波の勢いに圧倒され、気持ちが動転した。あまりにも破壊的だったからだ。

濁流の中に傾いた家屋が、渦巻く流れの中でゆっくり回転しながら沖に向かって移動し始めた。すでにばらばらに破壊された住宅の柱や梁、家財道具などさまざまなものが混ざり合って海へ押し流されている。悪夢を見ているような光景だった。思わず、携帯電話のカメラのボタンを押していた。それが何度目の津波なのか。私にははっきりとした認識がない。とにかく、何度も何度も寄せては返しを繰り返していた。

避難した高台からは、桐ヶ崎地区の全容は展望できない。しかし、瓦礫の多さや津波の凄まじさから察すると、地区全体が壊滅状態に違いないと思わざるをえなかった。そんな中で、遠出をした人と漁船で港の外に出た人を除けば住民は全員、この高台に避難している。住居を失っても人間は助かっている。それが、消防団としての私にとってはせめてもの救いだった。

私は小学1年生の時に、チリ地震津波を体験している。その時は引き波が先行し、砂浜に取り残された小魚がはねていた、というおぼろげな記憶がある。その後に寄せ波が襲って来て床上浸水はあったが、家屋が流出するような被害はなかつ

た。今回は地震も津波も半端なものではなく、チリ地震津波の時とは比較にならない規模だ、と直感した。

漂流者を漁船が救助した

津波の凄まじさに目を奪われているうちに、雪が降ってきた。避難者の中には高齢者や子ども、女性もいるので、寒さを凌がなければならない。今は廃校になっている旧女川第三小学校を避難所に使って、全員に移動してもらうことにした。

しかし、全く使われていない廃校の体育館では、寒さがひときわだ。高齢者たちのことも考えて近隣の尾浦地区にある保福寺で受け入れてもらい、高齢者を中心に避難場所を移動してもらった。保福寺には暖房もあり、ありがたかった。

桐ヶ崎地区の住民で津波警報を聞いた漁師の一人が、避難のために自分の漁船を沖に出している。そんな情報が届けられた。そのことが気になって、漁船が戻って来るまで私たちは高台で見守ることにした。女川湾の一角にある桐ヶ崎の漁港も、津波の引き波が陸地からさらってきた流木や瓦礫が海面いっぱい広がっていた。津波がようやく収まり始めたところに、その漁船は海面の障害物をかき分けるようにして戻ってきた。

私たちもポンプ車で港まで降りてゆき、船だまりに係留した漁船に近づいた。漁師1人だけだと思っていた漁船内に、ずぶ濡れになった3人の男性がいたので驚いた。どこから流されたのか、い



悪夢を見ているような光景だった（女川町提供）



瓦礫の多さや津波の凄まじさ（女川町提供）

ずれも見知らぬ人たちで引き波にさらわれて海に流されているところを漁船に助け上げたのだということだった。まだ海面は浮き沈みが収まらず、船を岸壁に接岸できる状況ではなかった。救助した3人を早く上陸させたいが、しっかりと足場を確保するのは難しそうだった。

海面が安定するのを待っていたところ、救助されたうちの1人が突然、流れ寄ってきた小舟に乗り移ってしまった。気が焦って待ち切れなかったのだろう。小舟は引き波の勢いに乗って、あっという間に沖の方へ流されて遠ざかってしまった。その後の小舟の消息を、私たちは確認することができなかった。だが、津波は収まって小舟が転覆するような状況はなかったので無事を信じた。

残りの2人は不安になったのか、「このまま、漁船内にとどまる」と言い出した。漁船が戻った時にはまだ明るかった空も、すっかり暗くなっていた。私たちも、このまま夜が明けるのを待たほうが安全だと判断。「明日の朝、必ず助けに来るから」と言い残して、その場を去った。

救出するまでの間も何回か岸壁まで行っては声を掛け、励ました。停電で真っ暗闇の岸壁では漁師たちが集まり、瓦礫が漂流する海面を不安そうに見守っていた。海が仕事場の漁師にとっては、津波に引っかき回されて瓦礫が一面に漂う港内は気が気でなかったに違いない。雪は降ったりやんだりが続く、時折、吹雪のように激しさを増した。緊張感が高まる中で、寒さがひときわ身に浸み。

ポンプ車の赤色灯を標識に

夜間も、戻ってくる船影が何隻もあった。しかし、海面に散らばった瓦礫が行く手を阻み、船は思うように進めず右往左往していた。停電で岸壁は真っ暗。手掛かりが何もない。そこで、海から見やすい地点までポンプ車を動かし、目印代わりにポンプ車の赤色灯を点灯し続けた。漁船ばかりでなく、定置網の船や離島を結ぶ定期巡航船も赤色灯を頼りに戻ることができ、後日、感謝された。

3月12日の朝になって、漁船の中にとどまった2人の救出に向かった。前日の地震の影響なのか、岸壁は沈下して水浸しになっていた。漁船も接岸できる状態ではない。打ち上げられてひっくり返っている小舟が目に入った。私と木村部長は、地元の人たち4、5人に手を貸してもらい、小舟を海に浮かべた。船外機は動かなくなっており、權でこぎながら漁船に近づいて救出に成功した。1人は女川町役場を退職した元課長、もう1人は銀行員だった。2人を尾浦の保福寺へ連れて行った。

私も、自分の持ち船を流された。6tの漁船は3月12日に女川湾の奥、石浜の辺りに漂着しているのを、運よく発見された。たいした損傷もなく、回航した。しかし、小舟3艘は失ってしまった。自宅は土台が残っただけで、影も形もなく流失した。

津波の高さは10mを超えていた、と推測できた。居住地域の様子を見に行き、啞然とした。敷地と道路の判別ができないほどに瓦礫がいたるところに散乱し、どこを歩けばよいのか、足の踏



地区全体が壊滅状態に達しない



瓦礫がいたるところに散乱し、足の踏み場もないみ場もない。桐ヶ崎地区では多くの家屋が流失し、なんとか形が残った住宅も住める状態ではなく、28世帯の全戸が被災した。ただ、地元の住民74人からは犠牲者が1人も出ていないことが確認された。それが、なによりだった。

大地震発生後から丸2日間ほど、私は何か食事をとった記憶がない。空腹を感じるゆとりすらなかった。しかし、避難者の食糧と水はなんとか確保しなければならない。避難者たちに了解を取って、瓦礫の中に投げ出された冷蔵庫を開けて利用できそうな限りの食品をかき集めた。隣接する竹浦地区で全壊を免れた住民からも、食糧を提供してもらうことができた。

避難所に保管してあったのか、あるいはどこからか調達したのか、プロパンガスコンロや鍋、釜を使って、避難所の女性たちがご飯の炊き出しをしていた。水も緊急用に備蓄してあった。私が被災後に初めて口にした食事だった。白米ではなく玄米だったが、おいしかった。

瓦礫に阻まれ陸の孤島に

竹浦地区では、死者・行方不明者が15人も出ていた。それをも顧みず、私たちに救いの手を差し伸べてくれたことを後で知った。桐ヶ崎地区の東側にある竹浦地区は、世帯数も戸数も倍以上で外洋により近いところだったので、被害が大きかったようだ。

避難している人たちの様子にも気を配りながら

巡回したが、廃校の小学校と保福寺に避難した人数が桐ヶ崎地区の総数よりもかなり多いような気がしていた。これも後でわかったのだが、竹浦地区や離島の出島からの被災者に加えて、大地震発生時にこの地区に立ち寄っていたり、通りすがりの人たちも避難していたのだった。

女川湾の東方海上に浮かぶ出島でも、全島合わせて25人近い犠牲者が出るほどの大きな被害があった。旧第三小学校で緊急患者が出たため、患者を乗せるために出島の島民たちの一部がヘリコプターから降ろされたのであった。

旧第三小学校に滞在した出島の避難者たちは、数日してから搬送予定地であった石巻へ移ることになった。その時に出島地区の責任者から「灯油や軽油、少量だがガソリンも島に備蓄したものが残っているはずだから利用してほしい」と申し出があり、感謝して出島まで被災を免れた船で地元の人たちと一緒に燃料を取りに行った。出島も船着き場は破損が激しく、大きな船では接岸できない状態になっていた。念のために曳航した小舟で上陸し、譲ってもらった燃料は、避難所の暖房に活用させてもらった。桐ヶ崎・竹浦地区では住宅が壊滅状態で、燃料はどこも流失してしまったので大助かりだった。

水は、竹浦地区の湧き水をタンクに汲み上げて運び込んでもらった。調理や飲み水にも使った。この水が原因かどうかは測りかねたが、下痢をする人も出た。しかし、背に腹は代えられなかった。

孤立無援で自力調達の状態が続いたのは、桐ヶ崎地区に通じる道路が崖崩れにより外部との往来



28世帯の全戸が被災した



自宅もろともすべてを失った

が途絶して陸の孤島状態がしばらく続いたためだった。「一刻も早く」と期待された自衛隊による救援活動の手が入ったのも3月16日。しかも、陸路ではなく、船による海上からの接近だった。

不自由な避難所での集団生活をできるだけ支障なく過ごすために、地区の責任者を中心に全員でルールや役割分担を話し合った。物資の調達、調理、食事の配布、清掃、休息場所の割り振りなど、最低限の日常生活は続けられるように配慮した。

消防団は水や食料の確保、トイレの整備を担当した。学校のプールにあった水をポンプ車からホースをつないで屋上の給水タンクに送水して、断水中の水洗トイレを利用できるようにした。給水タンクの水は洗濯用にも利用された。

避難者の中には、仕事で来ていた電気工事業者がいた。トラックの荷台に積んでいた発電機を提供してくれた。小学校にあった温風暖房機にその発電機をつないでくれ、大助かりだった。ほかに、石巻の調味料問屋も仕事の途中で大地震に巻き込まれて桐ヶ崎地区の避難所に身を寄せていた。この人も車に積んでいた調味料を提供してくれた。まるでドラマのような巡り合わせで、相互の助け合いが醸成されていた。

私も、自宅もろとも家族の思い出につながる貴重品も含めてすべてを失った。地元の人たちと避難所生活を続け、8月から仮設住宅に移った。しかし、散乱した瓦礫はなんとか片付いたものの、一時集積所に積み上げられたままの状態だ。子どもたちの所へ身を寄せる人たちもいて、仮設住まいは20世帯余りだった。